

MUSEUM

ミュージアム・アイズ

EYES

Mm
MEIJI UNIVERSITY
MUSEUM

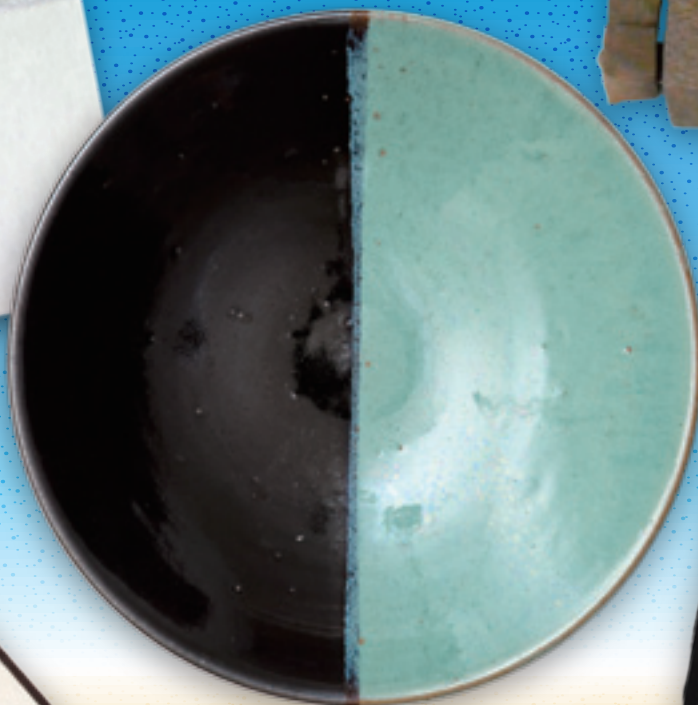
Vol. 69
2017

博物館特別展

特集

鳥取の工芸文化

— 手仕事の近世、近代、そして現代 —



Contents

- 博物館活動報告 — 新収蔵資料展「20世紀前期の陶磁資料群」を開催
「博物館考古学ゼミナール」が60回を迎えました
- 展示&リサーチ — 進化する不可能立体 ~真実がわかっても逃れられない不条理の世界~
- 市民レクチャー — 転封ごぼれ話2 - 転封と菩提寺 -
- 学芸研究室から — 玉里舟塚古墳の副葬品と被葬者像
- 収蔵室から — 「乍恐以書付奉願上候」 - 帳外の息子とその父の一件 -
伝楽浪出土 獣首金具付漆盃 - 梅原末治の実測図を手がかりに -
- 南山大学協定通信 / 図書館から / 博物館入館者数の動き / 団体見学の記録 / M2カタログ / 博物館友の会から

2017年度博物館特別展

特集

鳥取の工芸文化

— 手仕事の近世、近代、そして現代 —
Handmade Crafts from Tottori Prefecture

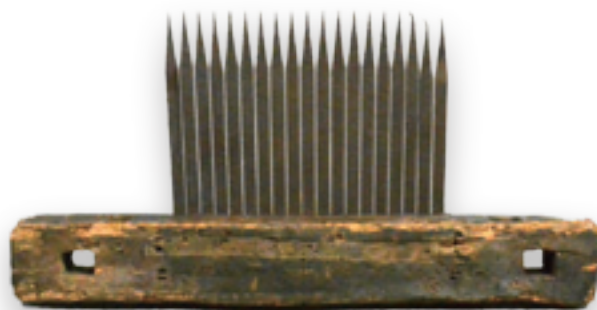
明治大学の創立者の一人岸本辰雄の故郷—鳥取県。江戸時代には木綿や鉄製品、和紙といった全国に知られる物産がありました。近代における社会・経済情勢の変化によって産業としては衰退を余儀なくされつつも、小規模ながら多彩かつ創造性豊かな工芸品として継承・再生され、高度経済成長を経た後、地域色・伝統文化に対する再評価の気運が高まりを見せる中でその価値が認められてゆきました。21世紀を迎えた今日、「工芸」は成熟社会におけるライフスタイルのモチーフとして注目を集めはじめています。

展示構成と主な出展資料

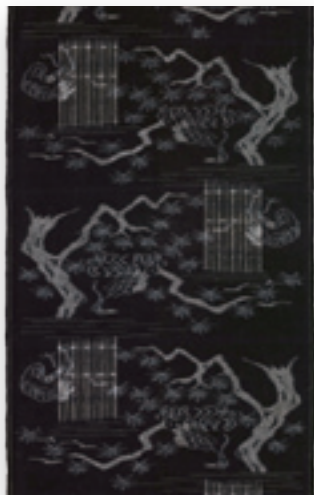
藩政時代の“御国産” —江戸期—

鳥取藩は他領からの物資移入に依存せず必需品を領内で自給する態勢を採り、殖産興業策によって財政基盤の強化に努めた。その結果、領内各所に特色的な産業が発達した。

- 専売制・殖産興業関連の藩政史料
- 鉄製品 稲扱千歯^{いなごきせんば}／因幡錠
- 陶器 久能寺焼 大平鉢／蘭文花瓶 等



稲扱千歯 19世紀前中期 鳥取県立博物館蔵



浜絣 鶴の巣ごもり文絣布 19世紀中後期 個人蔵

近代化 手工業の衰退 —幕末～大正期—

明治新政府は欧米を範とする工業の近代化を推進、大資本による機械工業が台頭する。国内市場の一元化により列島の経済発展の均衡は崩れ、県内の産業は衰退を余儀なくされる。

- 木綿絣 浜絣／糸車
- 和紙 漉桁^{すまげた}／簀
- 陶器 牛ノ戸焼 大酢徳利／鉄絵芦雁文大皿 等

工芸のルネッサンス —昭和戦前・戦後期—

民藝運動の同人であった医師吉田璋也をはじめとする関係者が、県内各所に残された工芸技術に着目、その継承と時代の変化に応じた商品開発を指導、工芸の復興が始まった。

- 陶器 牛ノ戸焼 緑釉黒釉染分皿
- 木工 伸縮式中折傘木製電気スタンド
- 木綿絣 弓浜絣
- 和紙 因幡紙見本帖 等



座彫英国風椅子
虎尾政次 1935年頃
鳥取民藝美術館蔵

ここに注目!

かつて収集された鳥取県の工芸品

前身の一つ旧商品陳列館は、昭和34年(1959)に日本橋白木屋で開催された中国五県物産展でまとまった数の鳥取産施釉陶器を購入、同40年(1965)には鳥取県に出向き和紙や陶器、郷土玩具類を収集しています。ちょうど鳥取で始まった新作民芸品による民藝ブームが盛り上がりを見せた頃です。それらの資料は鳥取の工芸文化のどのようなコンテクストに位置付くのでしょうか?



因州封筒・因州箋 大因州製紙有限会社製
1965年収集 館蔵



嘉永五年御国日記 二子 從七月至十二月
1852年 鳥取県立博物館蔵

古文書・民俗資料とのコラボレーション

工芸の歴史を遡ると江戸時代の各藩による特産物生産に行き着きます。工芸品と屏風絵や絵巻物が並べられる試みはしばしば目にするようになりましたが、今回、古文書が同時に展覧されるのは前代未聞か!? 鳥取藩の経済政策に関する古文書や江戸後期から明治期にかけての民俗資料など、今回の展示は美術、歴史、民俗という学芸部門の枠を越えた出展品のコラボレーションとなります。

伝統工芸にとっての近代を直視する

明治維新後に欧米の文物が入る以前一すなわち近世(江戸時代)以前に成立したものを我々は「伝統」と考えるようになりました。しかし、近世以前と我々が生きる現代をつないでいる“近代”において、それらがどのような経緯で継承されてきたかはどのくらい検証されているのでしょうか? 近代は伝統工芸にとってのブラックボックスとなっていないでしょうか? 今回、その実情に迫ります。



倉吉絁製品 倉吉絁保存会製
2017年収集 館蔵



上神焼飾皿 中森不入
1965年収集 館蔵

そして、近代とは一体何だったのか?

近代における機械工業の発展は、物資の充足という点で人々の生活水準の向上に資するものでした。しかし、そのために必要とされた規格化・標準化は多様性の喪失につながり、大量消費の行き着く先として安全な生存環境の破壊という未来までが予想されることになりました。この展示はある意味で「近代」という時代を問い、方向転換するための問題提起であると言えます。

鳥取発 手工芸の現在 一現代一

鳥取県は農水産品の生産・販売や観光振興とともに文化的イメージの対外発信に注力している。工芸は豊かな創造性の象徴として文化・産業・観光振興への寄与が期待されている。

- 因久山焼 / 牛ノ戸焼 / 因州中井窯 / 上神焼
- 弓浜絁 ■ 倉吉絁
- 因州和紙 手漉和紙見本 ランプシェード 等



牛ノ戸焼白釉ピッチャー
B・リーチ デザイン
20世紀前中期
鳥取民藝美術館蔵

特別展 INFORMATION

会 期 2017年10月19日(木)ー12月17日(日) 会期中無休

開室時間 10:00~17:00(入室は16:30まで)

入 場 料 ¥300 明治大学学生・教職員、高校生以下の児童・生徒及び引率教諭、明治大学博物館友の会会員、
明治大学リバティアカデミー会員、明大カード会員、身体障害者手帳・愛の手帳所持者とその介助者は無料

【主催】明治大学博物館 【共催】明治大学社会連携機構 【後援】鳥取県 鳥取県教育委員会 千代田区

開催記念イベント

■明治大学リバティアカデミー・オープン講座「工藝のルネッサンス 民藝のプロデューサー・吉田璋也」

鳥取民藝の父吉田璋也研究の第一人者がその魅力と新作民芸品について語る。

日時 2017年11月11日(土)13:30~15:30 会場 明治大学リバティタワー12F 1126教室

講師 木谷 清人 (公財)鳥取民藝美術館常務理事 (公財)鳥取市文化財団理事長

※リバティアカデミー会員以外の方も受講できます 受講料無料 先着100名要申込

申込・問合せ 明治大学リバティアカデミー事務局 TEL 03-3296-4423

■トークセッション「ススム トットリ “ノイズ”としての地方と工芸」

共催:明治大学博物館友の会

自らモノ作りを手がけ、また、鳥取関係の様々なイベントプロデュースに携わる講師と、

民藝を研究テーマとする気鋭の若手哲学者が現代における工芸の存在意義について熱く語る。

日時 2017年12月16日(土)15:00~17:00 会場 明治大学12号館10F 2103教室

講師 本間 公 工作社代表/木工職人 鞍田 崇 明治大学理工学部准教授

受講料無料 申込不要

問合せ 明治大学博物館 TEL 03-3296-4448



張子面 / 右上から時計回りに、お多福・猿・ぬけ・狸々・赤鬼・青鬼 柳屋本店 1960年収集 館蔵



因州和紙ランプシェード
株式会社中原商店 2017年収集 館蔵

展覧会の報告

新収蔵資料展「20世紀前期の陶磁資料群」を開催

第2次大戦後しばらくの間、銀座で陶商を営んでおられた方のご自宅に遺された、まとまった数の陶磁器関係資料についてご子孫から寄贈を受けました。その中には、櫛高台の付いた染付の鍋島焼や鍋島家の杏葉紋を窯印とする製品、第12代酒井田柿右衛門作の食器類、大戦によって廃窯となった横浜真葛窯の食器類、それ以外にも京焼、美濃焼など、20世紀前中期を中心とする陶磁史の変遷を語る上で将来貴重な資料となり得ると考えられる品々が多数含まれていました。そこで、恒例の新収蔵資料展の特別版として企画されたのが本展覧会（会期：2017年3月1日～4月9日）でした。



すでに前世紀のことになったとは言え、20世紀以降の陶磁史に関する研究は、それ以前に較べるとまだまだ端緒に着いたばかりです。しかし、近年では陶磁器の「伝統」に対する評価が製陶に影響を及ぼすようになった時期として、陶磁史上、一つの重要な時期として考えられるようになってきました。すなわち、ナショナリズムの高揚に関わりすぎて日本的なデザインが探求された昭和戦前期から、大戦後の文化財保護行政の確立期に至る動向です。受贈した資料群には、文化財への評価から「伝統」としてクローズアップされた色鍋島や柿右衛門様式、志野・織部といったものがある一方、その前段階の作風である鍋島藩窯の後継窯による染付の製品や12代柿右衛門による染錦手の製品なども含まれています。この展覧会では、高度経済成長期に入る以前を陶磁史における20世紀の“前期”と仮に定義し、受贈した資料の数々を公開しました。

明治大学リバティアカデミー博物館公開講座

「博物館考古学ゼミナール」が60回を迎えました

明治大学内外の講師を迎え、考古学の最新トピックスについてシリーズで夏と秋に講義を行う「博物館考古学ゼミナール」が、開始から30年、のべ4万5千名もの受講生に支えられ60回の節目を迎えることができました。記念すべき第1回は、考古学博物館時代の1987年6月6日に開催されたシリーズ「日本人類文化の起源を探る」第1講「先土器時代文化の復原を目指して」（講師：安藤政雄氏）であり、150名が参加しました。この受講生が中心となって、翌年6月に明治大学考古学博物館友の会が設立されることとなります。2000年には明治大学リバティアカデミー（当時は事業課）へ主管が移りますが、引き続き考古学博物館が文学部考古学専攻の協力を得ながら企画・運営を担い、新博物館開館後の2004年からは「明治大学博物館考古学ゼミナール」と改称して現在に至っています。今回の第60回では、「青銅器はどこまで明らかになったか」と題し、最新の研究成果で明らかになった弥生時代から古墳時代にかけての青銅器の実像について紹介しました。6月30日に行われた奈良県立橿原考古学研究所の清水康二氏による最終講「鏡の鋳型からみた三角縁神獣鏡」では、約70名の受講生が熱心に耳を傾け、終了後には李英美副館長より代表者に修了証書が手渡されました。これからも、考古学の最前線を実感できるようなさまざまなテーマで講座を展開して参ります。



1987年6月20日第1回考古学ゼミナール第3講「ナウマン象を狩る」(講師：稲田孝司氏)



2017年6月30日第60回考古学ゼミナール最終講(第4講)

進化する不可能立体

～真実がわかってでも逃れられない不条理の世界～

杉原 厚吉 (先端数理科学インスティテュート特任教授)

1. 勝手に情報処理をする脳

私たちはふだんの生活の中で当たり前のように目を使っている。だから、見たものの形は理解できると思いがちである。しかし、この素朴な常識は、不可能立体の錯視を体験すると、簡単に崩れてしまう。

たとえば図1(a)の画像を見たとき、私たちはすなおに一つの立体を思い浮かべる。垂直に立った柱の両側に、長方形の窓が取り付けられた立体である。しかし、図1(b)に示すように、この二つの窓には、1本の硬いまっすぐな棒が同時に貫通するという感覚にとられる。これが不可能モーション錯視である。実際には、図1(c)に示すように、この立体は平行四辺形の窓が手前に斜めに突き出した形をしている。だから、棒の動きは不可能ではない。私たち

がこの立体を見たとき最初に思い浮かべた形が、本当の形とは違っていたことが錯視の原因である。

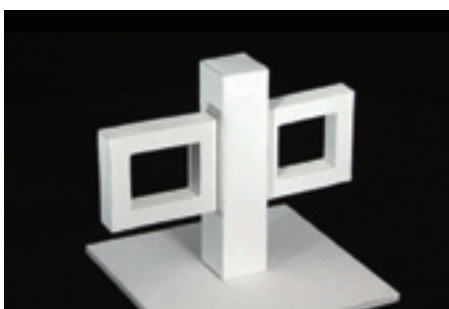
この立体では、もう一つ不思議なことが起こる。それは、図1(c)の方向から見て、立体の本当の姿を理解したあとでも、図1(a)の視点に戻ると、再び真横に長方形の窓が取り付けられた立体を思い浮かべてしまうことである。画像から立体の形を読み取る脳の働きは、知識や理性に基づいた論理的なものだと思いがちではないだろうか。しかし、実際には本当の形に関する知識を無視して、理性の届かないところで勝手な情報処理を行って、勝手に立体を思い浮かべてしまう。

1枚の画像には奥行き情報は無い。だから、画像を見て立体を思い浮かべるのは、画像から情報を取り出しているのではなくて、画像にはない情報を脳が勝手に補っているに過ぎない。これは、危ない作業である。ふだんの生活の中で

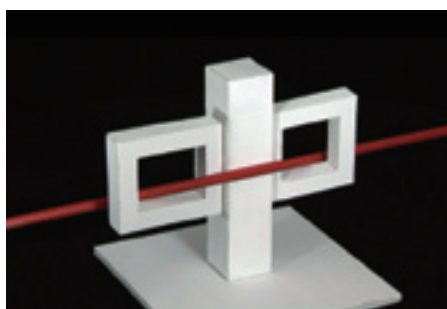
うまく立体を読み取ることができているように見えるのは、勝手に思い浮かべた立体の形が、たまたま当たっていたというだけである。この事実を、不可能立体の錯視は私たちに示してくれている。

2. 両眼立体視と錯視

私たちは目を二つ持っている。同じモノを右目と左目で見て、そのわずかな見え方の違いからモノまでの距離を知ることができる。これが両眼立体視と呼ばれる脳の機能である。数理的には、三角測量の原理と同じものである。だから、目の前に置かれた立体を直接見たときには、図1のような錯視は起こらない。図1やこれを動画にしたものを見たとき、私たちはあり得ないことが起こっているという錯視を起こすが、それは、カメラで撮影した画像を見ているからである。カメラにはレンズ中心が一つしかない。し



(a)



(b)



(c)

図1. 第2世代不可能立体「不可能モーション立体」

たがって、カメラで撮影した画像は、片方の目を閉じて一つの目だけで立体を見るのと同じ情報となる。この場合に奥行き情報が欠落する。したがって、錯視が起きる。

これが、初期の不可能立体から生じる錯視を観察して私が理解していたことである。しかし、その後、至近距離に置いた立体を両眼で見ても生じる立体錯視があることを発見した。

その一例が、図2に示す変身立体錯視である。図2(a)を見ると、ミニチュアガレージの屋根は、丸いかまぼこ型に見えるが、その後ろに置かれた鏡の中の姿は、三角を二つつないだ波型に見える。図2(b)は、この屋根を横から見たところである。鏡は普通の平面鏡で、



(a)



(b)

図2. 第3世代不可能立体「変身立体」

何の仕掛けもない。直接見た姿と鏡に映った姿が、同じ屋根の二つの見え方だとはとても思えないであろう。

図2は、カメラで撮影した画像であるから、片方の目で見た情報に落ちているが、この立体は、直接目の前に置いて両目で見ても同じような錯覚が生じる。すなわち、両眼立体視を無力にするほど、この錯視は強い。これはまた新しい発見であった。

3. 不可能立体の進化

私が不可能立体の錯視を研究するようになったきっかけは、不可能図形と呼ばれるだまし絵を立体化する方法を見つけたことであった。その立体の一例を図3(a)に示す。L字型の立体が2個あり得ない形で組み合わせさせたように見える。この立体を別の方向から見たのが、同図(b)である。このように、形自体があり得ないように見える立体には「だまし絵立体」という名前をつけた。これが第1世代の不可能立体である。



(a)

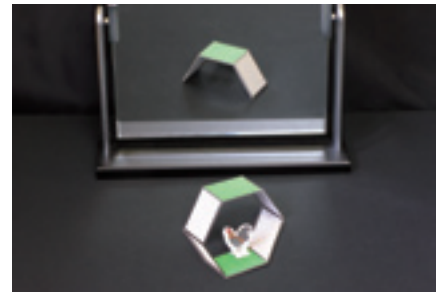


(b)

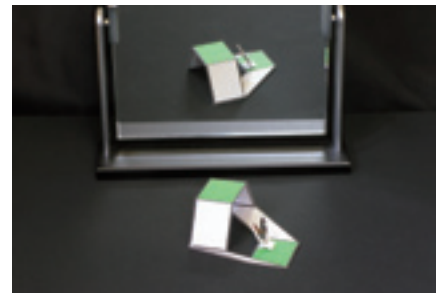
図3. 第1世代不可能立体「だまし絵立体」

私が見つけた立体を世代ごとに分類しているが、図1の不可能モーション立体が第2世代、図2の変身立体が第3世代である。

ほかには、図4に示すように、鏡に映すと一部が消えたように見える第4世代の「透身立体」、図5に示すように、鏡に映したとき立体の形は変えないで、つながり方だけが変わる第5世代の「トポロジー攪乱立体」などがある。図4、5でも、(a)は立体を錯視の起こる視点から見たところで、(b)は一般の視点から見たところである。

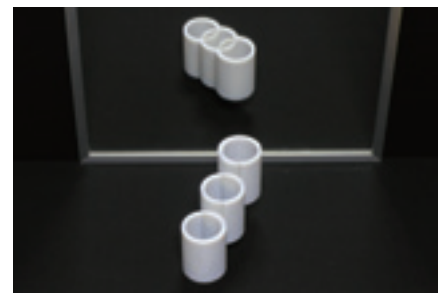


(a)

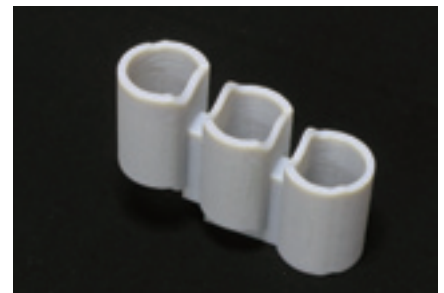


(b)

図4. 第4世代不可能立体「透身立体」



(a)



(b)

図5. 第5世代不可能立体「トポロジー攪乱立体」

これらの立体から起こる錯視を観察すると、目で見て立体の奥行きを理解しようとする脳の働きは大変危ないものであることがわかる。この体験を展示を通して共有していただけたことと思う。

転封こぼれ話 2

— 転封と菩提寺 —

日比 佳代子 (刑事部門学芸員)

延享4年(1747)3月19日、幕府は、内藤政樹陸奥国磐城平7万石、牧野貞通日向国延岡8万石、井上正経常陸国笠間6万石の三方領地替を命じました。この転封によって、内藤家は磐城平から延岡に引き移る事になります。内藤家の転封の詳細については、2009年度特別展『大名と領地 お殿様のお引っ越し』や、論文「転封実現過程に関する基礎的考察」(『明治大学博物館研究報告』16号、2011年)で考察してきました。大筋はこれらを参考にさせて頂く事にして、ここでは、転封時に見られた藩主菩提寺との関係について紹介する事にしましょう。

そもそも内藤家が磐城平に領主として入封したのは、元和8年(1622)の事です。それ以前は、上総国佐貫に領地を持っていました。内藤家は、もとは三河国碧海郡の矢作川西方に位置する姫郷の出で、松平家(後の徳川家)の家臣となり、徳川家の関東移封に随って関東に移りました。この時、徳川家から上総国佐貫に2万石を与えられ佐貫城主となります。その後、当主の家長は関ヶ原合戦の前哨戦・伏見城の戦いで伏見城に籠城して戦死、家長の遺領を引き継いだ嫡子政長は、大坂の陣で安房国の警固や江戸城留守居を勤めるなど、徳川家の政権獲得の道に付き従い、大名として成長していきます。加増を経て上総国と安房国で4万5000石にまで石高を増やし、元和8年に加増されて7万石で磐城平に入封します。それまで磐城平領主だった鳥居家は、この時の転封で出羽国山形に移りました。

延岡への転封を命じられた延享4年の時点で、磐城平領に入封してから120年以上が経っていたので、内藤家や家臣達にとって転封は思いも掛けない事でした。延享4年の三方領地替えでは、転封の命が下ってから4ヶ月半程して旧領主と新領主の城の受け渡しが行われています。つまり、

この間が転封の準備期間という訳です。磐城平から延岡というまれに見る遠方への転封となった事、磐城平に入ってから時間がたっていた事などが相まって、内藤藩の転封には処理しなければならない事柄が幾つも生じました。その一つが藩主菩提寺・善昌寺との関係です。

善昌寺は、慶長5年(1600)に伏見城で討ち死にした内藤家長のために、遺領を相続した政長が上総国佐貫に菩提寺として建立した寺で、家長の戒名の字をとって道本山善昌寺と名付けられました。また、母(家長の妻)の為に別菩提寺を建立し、戒名から月廣山馨崇院としました。江戸時代の記録ではありませんが、近代にまとめられた記録には、この時、馨崇院に四郎仏という仏が安置されたと記されています。内藤家が元和8年に磐城平に転封した際には、寛永3年(1626)に磐城平の飯野平に寺を建立し、佐貫の善昌寺を呼びよめます。この時、馨崇院は磐城平には移らなかった為、善昌寺の山号を改めて、家長とその妻の戒名を合わせて、馨崇山善昌寺とします*¹。

しかし、延享4年の転封では対応が異なりました*²。転封の命が下ってさほど時間がたたない内に、善昌寺は知行(善昌寺が内藤家から恩給された領地)が減少してもいいので磐城平に残りたいという意向を示します。善昌寺としては、延岡にはついていかに、磐城平で内藤家の菩提を弔い続けるという考えだった様です。この申し出を受けた藩の役人達は当惑していますが、善昌寺を今後菩提寺としない事や墓参が困難になるので内藤家の位牌を移す事などが検討されていきます。

結局、内藤家の全ての位牌と四郎仏は延岡に引き取り、知行150石は召し上げと決まりました。そして、善昌寺にあった磐城平藩5代目藩主内藤義綱と同じく4代目藩主

内藤義孝の兄・内藤義英の廟所はそのままにして行くので、毎年金 50 両を与える事にし、義稠、義英、義孝の母だけは善昌寺に法事をさせるが、それ以外は鎌倉で法事をする

と善昌寺に告げています*³。この時与えられた 50 両の内訳は、永代金が 20 両、廟所の回向料が 30 両でした。なお、「鎌倉で」というのは、内藤家菩提寺の一つである鎌倉の光明寺の事を指します。これに対して善昌寺は、四郎仏は寺の縁起にもあるものなので、いままで通り寺に預けおいてほしいと願います。また、この際、御手当の継続も要求した様です。しかし、藩側は

四郎仏之儀御家ニ附候仏躰之儀、如何様ニ御願 [(虫食いによる破損)] (候共カ) 難被御聴届事

四郎仏は内藤家の仏であるから、どのように願い出ても聞き届ける事は難しい

として、手当の件と共にこれを許しませんでした。内藤藩としては、内藤家が建立した寺でもあり、廟所もあるので最低限の対処をし、善昌寺との関係を整理したという形です。

転封にあたっては、磐城平からは大量の荷物が送り出されました。当然、歴代藩主の着用した具足などは特別輸送ですが、最も厳重な体制で輸送されたのは、将軍が内藤家に対して領地の支配を認めた書類—領地安堵状 (朱印状) です。そして、その朱印状と一緒に運ばれたのが、御文書長持 1 棹、御内書櫃 3 つ、四郎仏なのです。すなわち、これが内藤家にとって、最も重要なものだったという事にな

ります。これらの荷物は 6 月 28 日に、朱印状の輸送を監督する藩士や寝ずの番で朱印状を守るお供の者と共に磐城平から送り出されています。

荷物の輸送は、多くのものが安くて早い船を使い、磐城平から海路で直接延岡に送られました。しかし、船は難破の危険があるため、重要なものはこのルートを使っていません。大坂まで陸路の後、大坂から海路で延岡に送っているものもあります。四郎仏と共に善昌寺から引き揚げられた内藤家の位牌 19 体と附属の仏具は、大坂までは陸送され、大坂からは船で延岡に送られています。さらに、領地安堵状が入った朱印箱、御文書長持、御内書櫃、四郎仏に関しては、磐城平から延岡まで完全に陸路で輸送しています。これらの荷物が大坂に着いたのは 7 月 24 日、延岡城に着いたのは 8 月 20 日です。約 2 ヶ月かけて磐城平から運ばれた事になります。朱印状などと共に、内藤家にとって四郎仏が如何に重要なものであったかが窺えるエピソードと言えます。

*¹ 「諸書付之写」(内藤家文書 2-9-18)、「鎌倉御霊屋覚書」(内藤家文書 3-1-38) より。四郎仏については「善昌寺馨崇院御建立四郎仏」(内藤家文書 1-31-112) より。なお、寛永 3 年に磐城平に建立された善昌寺は一度消失し、のち再建されています。

*² 以下の経緯は、「万覚帳」(内藤家文書 1-7-35)「日記書抜」(内藤家文書 1-11-135-7)「鎌倉御霊屋覚書」(内藤家文書 3-1-38) より。

*³ この他、粃 100 俵を付けおくので、それを運用して利子で寺の修復費をまかなえとも指示しています。



奥州岩城平之城絵図 (内藤家文書 3-23-10-34-11)

玉里舟塚古墳の 副葬品と被葬者像

忽那 敬三 (考古部門学芸員)

1. 玉里舟塚古墳とは

博物館地下1階の階段を下り、常設展示室に入ると廊下の奥に見えるのが茨城県小美玉市の玉里舟塚古墳(以下、舟塚古墳)の埴輪群である。全高1mを超える家形を中心に陳列された筒形(円筒埴輪)や人物を象った6世紀代の埴輪群は、2004年の開館当初から考古部門展示のシンボルのひとつとなってきた。2016年の改修を機に、2008年以降の研究で新たに復元された馬形埴輪や力士埴輪などが加わり、その破格の大きさもあわせ、単独の古墳から出土した埴輪群の展示としては都内でも最大級の規模となった。茨城県内では家・馬・人物を中心とする形象埴輪群像が良好な形で発掘調査された例が少ないこともあり、舟塚古墳の資料は、関東を代表する埴輪群のひとつとしてその存在が改めてクローズアップされている。では、このような立派な埴輪群を立て並べることができた舟塚古墳の被葬者は、どのような人物であったのだろうか。埴輪に注目が集まりがちな舟塚古墳であるが、副葬品が出土していることはあまり知られていない。今回は、埋葬施設と副葬品からその被葬者像に迫ってみたい。

2. 埋葬施設と副葬品

舟塚古墳は、霞ヶ浦の北西に位置する「高浜入り」の台地上に築かれた全長72mの前方後円墳である。個人の敷地内に保存されており、1965年に茨城県教育委員会等から委託を受けた明治大学考古学研究室が5回にわたって発掘調査を実施した。調査は、のちに考古学専攻教授となる大塚初重氏と小林三郎氏が担当し、明治大学の学部生・大学院生が携わったほか、近隣の石岡市の高校生も体験的に参加した記録が残されている。

同じ6世紀代の前方後円墳が湖岸の丘陵上に連綿と築かれているのに対し、舟塚古墳は、西側に隣接する雷電山古墳(大型の帆立貝形古墳、全長約56m)とともに1kmほど内陸に入った場所に立地している点で様相が異なる。墳丘に葺石はなく、浅い周溝と祭祀用のステージである造り出しが墳丘の西側に確認されている。墳丘東側には溝も造り出しもないが、一部で円筒埴輪列が検出されているため、周溝の代わりに埴輪列を並べて古墳の領域を示していた可能性もある。

舟塚古墳で確認されている埋葬施設は、後円部で検出された全長2.4mの箱式石棺1基のみである(写真1)。筑波山



写真1 埋葬施設の出土状況(左: 検出状況。外周施設の蓋石が外されていた 右: 白色粘土下の裏込め状板石の検出状況)



写真2 舟塚古墳の副葬品
 (1.馬具・刺金、2,3唐草文銀製大刀装飾片、4.銀製鍍金梔子玉片、5.直弧文が描かれた鹿角製刀装具) 縮尺不同

麓の雲母片岩を板状に加工して組み合わせた石棺で、霞ヶ浦周辺でよくみられるものであるが、舟塚古墳は「二重の箱式石棺」とも表現されるように、さらにもう一重、石棺の外側を囲うように板石を巡らせる点に特徴がある。また、石棺は長さ7.4mの穴(墓坑)に据えられ、白色粘土でパックされていたが、その粘土を除去していくと石棺の外側に敷き詰められた最大30cm程度の板石約300点が見つかった(写真1右)。石棺の側面が外側に倒れることを防ぐ支え(裏込め)のようにも見えるが、隙間が多く構造的な効果が低いことから、竪穴式石槨などの形状や裏込めを模倣したものと思われる。二重の石棺や裏込め状の板石群は他にほとんど例がなく、舟塚古墳の特異性を際立たせている。

おそらく、石棺本体と外周施設には被葬者とともに多量の副葬品が納められていたと考えられるが、発掘調査の結果、少なくとも2回以上の盗掘が行われていたことがわかった。なかでも明治期以前と想定される盗掘では、埋葬施設の上面が現れるまで墳丘を掘り返したうえで外周施設の蓋石を全て取り外し、そのまま埋め戻すという大がかりなものであった。石棺本体は蓋石で覆われていたが、人がすり抜けられるほどの穴が開けられており、外周施設だけでなく石棺の副葬品もその際にほとんど失われてしまったと思われる。そのため、明治大学による発掘調査では、破片状態の副葬品がわずかに残されていただけであり*1、評価が困難な状態であった。

直径2ミリほどのガラス小玉も漏らさない丹念な調査の結果、大小のガラス製玉類(紺・緑・黄色)、銀製梔子玉、唐草文銀製大刀柄頭装飾、直弧文が描かれた鹿角製刀装具、鉄鎌(古墳時代後期に多い長頸式)、新しいタイプの甲である掛甲(小型の鉄板を数百~千枚綴じ合わせたもの)の小札、弓の金具、黒漆塗の鞍や金銅装の馬具片など約90点が発見された。また、人骨は歯や大腿骨から20歳以下の若年(性別不明)と推定されている。なかでも注目されるのは唐草文が描かれた銀製の大刀装飾である(写真2-2)。これは、刀を握る柄の部分の下端を覆っていたもので、平坦な形状であることから日本列島に特有の「倭風装飾付大刀」の飾りであることがわかった。このタイプの大刀は茨城県内では2か所、関東地方でも21か所しか知られていない「ごく一握りの階層が所有する儀仗刀」(菊地2010)と評価される希少な大刀である。しかも、この舟塚古墳例に極めて近い文様構成をもつ例が奈良県藤ノ木古墳でも確認されており(金・銀装の「大刀4」、榎考研編1993)、舟塚古墳例は特別な大刀であるとみられるの

である。さらに、文様が描かれた鹿角製の刀装具(刀子の柄か、写真2-5)も全国で30か所、茨城県内では伝資料2例のみとかなり類例が少ないものであるし、一部鍍金したものがある銀製梔子玉(写真2-4)についても全国でわずか20か所のみで分布の最も東にあたるなど、限られた一部の有力首長のみしか所有しえなかった副葬品がみられるのである。

3. 舟塚古墳の被葬者像

72mという古墳の大きさそのものは卓越した規模ではないが、周溝をもち、造り出しを築き、大型の円筒埴輪と埴輪群像を立て並べる点で、舟塚古墳は6世紀代の関東における有力首長墳のひとつであるといえる。相当量が納められていたと思われる副葬品には、倭風装飾付大刀をはじめ全国的にも希少なもののほか、甲や、金銅で飾った馬具など、関東だけではなく近畿の有力首長層との間に密な交流があったことをうかがわせる。一方で、地元産の石材を使う特殊な構造の埋葬施設には強い在地色が感じられる。地域のアイデンティティをもちながらも、近畿をはじめ外部と積極的に交流し、古墳の立地、スタイルを一新した埴輪などもあわせ、伝統にとらわれない進取の気概にあふれた若き首長の姿を彷彿とさせる。この約半世紀にわたって周辺地域をしのいで大型の前方後円墳を築造し続ける玉里古墳群の時代は、この舟塚古墳の首長によって切り開かれたのである。

*1 1965年9月に舟塚古墳から盗掘されたとされる資料が茨城県立歴史館に所蔵されている(伝舟塚資料)。環頭大刀、銅鏡、馬具、銅鏡など優品が多いが、6世紀後半以降とみられるものも含まれている。めぼしい副葬品は明治期以前の盗掘で既に取り尽くされている可能性が高いため、「伝舟塚資料」のうち、舟塚古墳出土資料はごくわずかであるとみられる。

【主要参考文献】

- ◆大塚初重・小林三郎1968「茨城県舟塚古墳I」『考古学集刊』第4巻第1号 東京考古学会
- ◆大塚初重・小林三郎1971「茨城県舟塚古墳II」『考古学集刊』第4巻第4号 東京考古学会
- ◆菊地芳朗2010『古墳時代史の展開と東北社会』大阪大学出版会
- ◆忽那敏三2013「玉里舟塚古墳の副葬品と年代」『明治大学博物館研究報告』第18号 明治大学博物館
- ◆奈良県立橿原考古学研究所編1993「斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書」奈良県立橿原考古学研究所

おそれながらかきつけをもってねがいあげたてまつりそうろう

「乍恐以書付奉願上候」

— 帳外の息子とその父の一件 —



現代、私たちは戸籍に登録されているが、この前身とも言えるのが江戸時代の宗門人別改帳^{＊1}などと呼ばれるものだ。この改帳から名前を除外されることを帳外^{ちやうはずれ}という。帳外は、次のような場合に行われた。一つは、町村内や身内に、身元不埒で犯罪者となる恐れのある者がおり、それによって周囲に災難が降りかかる可能性がある場合。もう一つは、失踪した者を規則通り6ヶ月捜索しても見つからず永尋^{＊2}となった場合である^{＊3}。帳外は親族及び町村の役人から代官所等に願い出て行われ、帳外にされた者は親族や町村との縁を法的に切れ、無宿者となった。

今回はこの帳外に関する史料「おそれながらかきつけをもってねがいあげたてまつりそうろう^{＊4}」を紹介しよう。相模国津久井県長竹村（現在の神奈川県相模原市緑区長竹）の九郎兵衛は不届者で、父彦四郎に手向かうなど周囲を困らせていた^{＊5}。その為、明和元年（1764）、彦四郎や親戚一同から帳外にされた。ところが、3年後の同4年（1767）10月、父彦四郎は何を思ったのか九郎兵衛を呼び寄せ、家に隠し置いたのである。これが発覚し、彦四郎は村役人たちから「帳外の者を家に置いてはいけない。」と注意される。しかし、その後も九郎兵衛を家に置いていたようで、同年11月10日の夜、村内の庄兵衛という者の家で九郎兵衛

が狼藉を働くという事件が起こった。また九郎兵衛は同夜明け方、村名主 彦左衛門の家で再び狼藉を働く。村の者たちは非常に困り、代官である江川太郎左衛門の役所に願い出て、今後九郎兵衛をそのまま置いておくことがないように彦四郎及び親類・五人組の者たちに申し伝えてほしいとした。

ではここで、なぜ村役人が帳外の九郎兵衛を家に置いてはいけないと言ったのかに注目してみよう。江戸時代の村と村人の関係は、現代の私たちが思うよりも密接である。村は、幕府や藩から公儀の法に触れない範囲での自治を認められており、自分たちで掟を定めるなどして秩序維持をおこなっていた^{＊6}。秩序を乱す者は村人とは認められない。そうした者が罪を犯せば、連座という連帯責任によって事件に無関係な村人も罰されるなど、村全体の迷惑となる恐れがあったからである。不届者の九郎兵衛も、これに該当したのだろう。九郎兵衛が犯罪者となって村に災難が降りかかることを恐れ、帳外にして追放した。そのため、村に置いておくわけにはいかなかったのだ^{＊7}。

このように本史料は、江戸時代の村人が帳外者に対して持っていた認識を示すものであるが、その一方で私たちに、この一件の裏で起きていた人々のドラマを想像させてくれるものでもある。例えば、帳外を願い出た張本人の父彦四郎が、なぜ息子九郎兵衛を呼び戻したのか？その理由は不明であるが、彦四郎が九郎兵衛への情を捨てきれなかったからか…または、急な跡取りが必要になったからか…といった想像を膨らませながら読めるのも面白い。

なお九郎兵衛はその後、中野村（現在の相模原市緑区中野）の治郎右衛門と四郎兵衛の世話になって行いを改め、1年後の明和5年（1768）に長竹村へ戻ることとなった^{＊8}。

（高野 美佳）

＊1 領内の戸口や人民の実態を把握する調査の結果を記した人別改帳と、キリシタン弾圧のため、領民がキリシタンでない事を檀那寺に証明させる信仰調査の結果を記した宗門改帳を統合したもの。

＊2 失踪者の捜索方法のこと。失踪者の捜索は30日を単位として行われ、6期（180日）が経過しても行方不明の場合は、永尋として親族に無期限の捜索義務が課せられた。

＊3 大石慎三郎校訂『地方凡例録』下巻、東京堂出版、1995年

＊4 明治大学博物館蔵、明治大学刑事博物館目録9-甲-D村-3「乍恐以書付奉願上候 九郎兵衛 帳外之処彦四郎隠置併九郎兵衛工理不尽に付吟味願」

＊5 明治大学博物館蔵、明治大学刑事博物館目録9-甲-D村-1「覚 五人組内彦四郎伴九郎兵衛 儀彦四郎江手向仕段御札に付言上」

＊6 浅古弘・伊藤孝夫・植田信廣・神保文夫編『日本法制史』、青林書院、2010年

＊7 帳外については、2017.2.21（火）～6.14（日）まで明治大学博物館常設展示室内にてコラム展「帳外（ちやうはずれ） なぜ、彼らの名前は人別帳から消されたのか—」を行った。

＊8 明治大学博物館蔵、明治大学刑事博物館目録9-甲-D村-5「一札之事 九郎平助当赦免願」

伝楽浪出土 獸首金具付漆盃 う —梅原末治の実測図を手がかりに—

楽浪とは、前漢から西晋にいたる中国の王朝が朝鮮半島北部地域を統治するために置いた出先機関である。紀元前108年に設置され、313年に高句麗によって滅ぼされるまで約4百年間存続し、朝鮮半島や日本列島に中国の文化や制度を伝える拠点的な役割を果たした。

楽浪の遺跡調査は1909年から戦中にかけて盛んに行われ、古墳から漆器・玉器・青銅器などが出土した。この時期の調査の実態を知る資料としては、発掘調査報告書や調査担当者の手記等があるが、ほかに、調査の主力メンバーのひとりであった梅原末治（1893-1983）が残した諸資料が東京駒込の東洋文庫に所蔵されている。梅原は京都大学の教授を務めた人物で、特にアジア青銅器の研究に尽力したことで知られる。資料の内容は、遺跡遺物調査の記録、実測図、見取図、拓本、写真など多岐にわたり、楽浪について網羅的に知ることができる大変貴重な資料となっている。

ウェブ上で公開されているこの梅原資料のなかに、現在、当館が収蔵している楽浪漆器と思しき実測図が二枚ある（請求記号：104-0208-629、104-0208-630）。それらは「盃」と呼ばれる大型の浅鉢の内底面と胴部外面の一部を実測したもので、器の表面に描かれた雲気紋を丁寧に写し取っている。当館の楽浪漆器と梅原実測図を比較すると、文様と欠損部分がびたりと一致する。雲気紋は楽浪漆器によく見られる文様のため、文様の一致だけでは当該漆器を実測したものとは言えないが、欠損部分まで一致したとなると可能性は高い。図面には、ほかに所蔵者の名前も記されており「東京 繭山順吉氏」とある。当館の収蔵資料台帳を確認したところ、問題の漆器は1953年に繭山龍泉堂より購入されていた。繭山龍泉堂は百年近く続く東洋古美術の老舗で、店の二代目を務めた人物が繭山順吉（1913-1999）である。東京に店を構えていたことから、「東京 繭山順吉氏」は繭山龍泉堂の二代目を指していると考えて問題ないだろう。以上より、梅原が実測したのは当館収蔵の楽浪漆器とみてほぼ間違いない。

梅原実測図により漆器の本来の姿が明らかになってきた（図1）。当該漆器は完形ではなく、大小の破片と青銅製飾金具数点からなる（写真1）。破片も全て揃っているわけではなく、購入時の記録もあまり残っていないため、これまで全体像が判然としなかったが、実測図から「盃」である



図1. 館蔵資料および梅原実測図を基にした復元想定図（著者原図）



写真1. 獸首金具付漆盃（一部）



(a)雲気紋

(b)朱色が残る

写真2. 文様部分拡大

ことと、それぞれの破片が器のどの位置にあたるのが判明した。また現在は、文様の色は茶色に見えるが、実測図には「此ノ帯多彩ナリ」「二色で描く 朱」等の記述があり、もとは鮮やかな色彩を呈していたことがわかった。この記述を裏付けるように、胴部外面上方にわずかだが朱色の彩色を確認できた（写真2(b)）。

梅原の研究スタイルは、一つのテーマについて、その周辺の資料も含めて徹底して調べる、というものだったらしい。楽浪に関しても、発掘だけでなく収集家の中を歩き回って調査していた様子が窺える。

（岡地 智子）

【参考文献】

- ・高久健二「植民地期における楽浪郡の考古学史」
（『月刊考古学ジャーナル』第596号、ニューサイエンス社、2010）
- ・東洋文庫 梅原末治考古資料画像データベース
http://124.33.215.236/umehara2008/ume_query.html

明治大学博物館と南山大学人類学博物館の協定事業も8年目を迎えました。今年も様々な協定事業を行っています。

5月2日(火)には、南山大学人文学部黒沢浩教授の「博物館概論」の授業の中で、外山徹学芸員が在学生向けの特別講義を行いました。

講義タイトルを「大学博物館の使命と機能」として、収蔵資料の種別(学術資料、創立者・教員などの個人収集品、大学史関係資料など)や、近年のエクステンション用施設としての動向などから大学博物館の類型化をおこない、代表的な館についてその概略を示すとともに、大学博物館におけるミッションや事業展開について当館を事例に解説しました。

また、9月30日(土)から11月5日(日)には、収蔵資料の交換展示を行います。南山大学人類学博物館を会場として、明治大学博物館の収蔵品による「三河武士内藤家、大名への道」展を、明治大学博物館を会場として、南山大学人類学博物館の収蔵品による『「二十世紀の石器時代人」を求めて-南山大学東ニューギニア学術調査団の軌跡-』展を開催します。



図書室からでは、博物館併設の図書室に関することや図書についてご紹介します。今回は、図書室の書棚増設について取り上げます。

博物館図書室では本年、書架横溢によるスペース確保のため、書棚の増設工事を行いました。

図書室は約9万冊の図書を所蔵し、毎年2,000冊を超える図書を受入(所蔵登録)しています。その他、雑誌は約3,000のタイトルを受入しており、所蔵登録せずに排架する図書も数多くあります。図書の配置場所は発掘・図録・参考・一般と分かれています。受入する図書のうち7割以上が発掘となっています。そのため発掘の書架が特に窮屈な状態となり、不便な状態が続いていました。現在、増設した書棚を活用



しながら、書架のバランスを取る書架移動作業を随時行なっています。

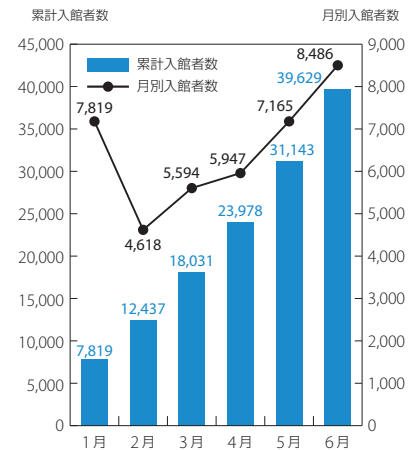
新しい書棚はハンドル式移動棚となります。ハンドルは手前に引くとロックされ、奥へ押し込むと解除されます。付近の棚間に他の利用者がいないことを確認してからハンドルを回して棚を移動し、ロックをしてご利用ください。また、プラスチック製の踏台は破損のおそれがあるため、利用後は棚間から廊下へ出すよう、ご協力をお願いします。

博物館入館者数の動き (2017年1月～6月：延べ人数)

2004年4月以降の
総入場者数累計 **879,772人**

1月～6月	延べ人数
図書室利用者数	1,836
教室等利用者数	1,610

特別展示室来場者内訳		開催日数	来場者数
1/8～2/5	震災遺産展 我曆→ガレキ→我歴	29日間	4,260
3/1～4/9	新収蔵資料展 20世紀前期の陶磁資料群 鍋島焼の近代/柿右衛門様式の復興/その他	40日間	1,952
4/15～5/28	新収蔵・収蔵資料展2017	44日間	2,751
6/3～6/27	明治大学図書館所蔵 エジプト学貴重書展	24日間	2,590



団体見学の記録 2017年1月～6月

※事前に見学のお申し込みをいただいた団体のみ掲載しております。

- 【一般】 明治大学東京都南部地区父母会 (26名) / マナベル倶楽部 三都歴史ウォーク (35名) / 株式会社 朝日カルチャーセンター・新宿 (18名) / 東松山市民俗芸能保存連絡協議会 (25名) / 鈴江会 (12名) / 春秋の会 (57名) / 歴史に親しむ会 (8名) / 船橋市コーディネーター西部ブロック (10名) / 楽笑会 (13名) / 明治大学国際連携事務局 (40名) / 弥栄会 (38名) / TACハイキング会 (13名) / 江東シルバー共助会 (30名) / まほろば会 (30名) / むさしの歩こう会 (40名) / 荒川シルバー大学社会科見学教室 (65名) / 東葛川柳会 (10名) / 18元気会 (50名) / ウォーキングサークル宙 (15名) / 埼玉県立越谷西高等学校PTA (45名)
- 【中学校】 中野区立北中野中学校 (6名) / 成城中学校 (87名) / 中央区立佃中学校 (6名) / 共立女子中学高等学校 (40名) / 岩手県奥州市立江刺第一中学校 3年4組 (32名) / 福島県福島市立福島第三中学校 3年生 (15名) / 村山市立楯岡中学校 3年生 (21名) / 東京都立両国高等学校附属中学校 3年生 (22名) / 魚津市立東部中学校 (6名) / 栄町立栄中学校 2年生 (42名) / 豊橋市立吉田方中学校 3年生 (41名) / 横浜市立上永谷中学校 2年3組 3班 (6名) / 愛知県知多郡美浜町立野間中学校 (30名) / 青森県立三本木高等学校附属中学校 3年生 (82名)
- 【高等学校】 専修大学附属高等学校 (36名) / 千葉県立八千代高等学校 (20名) / クラーク記念国際高等学校 秋葉原ITキャンパス (108名) / 東京都立鷺宮高等学校 2年生 (42名) / 早稲田大学高等学院 3年L組 (38名) / 品川エトワール女子高等学校 2年生 (42名) / 水戸葵陵高等学校 (50名) / 岡山県立岡山城東高等学校 (25名) / 神奈川大学附属高等学校 2年生 (16名)
- 【大学・大学院・専門学校】 横浜国立大学インフラプログラム (留学生) (11名) / 成城大学法学部刑事訴訟法ゼミ (20名) / 学生プロジェクト (100名) / 東京言語学院 (54名) / 明治大学文学部「福祉と社会教育」(10名)

M2カタログ 考古Tシャツ・ボールペンがリニューアルしました!!

Tシャツには、当館所蔵の茨城県玉里舟塚古墳から出土した埴輪をデザイン、色は鮮やかなジャパンプルーで、サイズはL・M・Sと取り揃えております。

またボールペンには、山形土偶・石器・鏡・銅鐸のモチーフがシックなえんじ色でプリントされています。インクは黒・赤2色でシャープペンシルも一体型になっています。おまけに便利なリフトクリップが付いていて、厚手のものにも楽にしっかりと挟むことができます。自分用にもお土産用にも最適な一品です。



Tシャツ各サイズとも 1,100円



ボールペン 300円

今年度後期の行事予定

明治大学博物館友の会は、博物館のご協力をいただいで自主的な学習活動の一環として講演会や見学会などの行事を計画・実施して、広く一般の方々にも参加をいただいでいます。10月～1月の行事のご案内です。

近世史講演会

「富くじと江戸町人文化」

日時：10月7日(土)14:00～16:00

会場：明治大学駿河台キャンパス

グローバルフロント2階4021教室

講師：滝口 正哉氏(成城大学他非常勤講師)

特別展「鳥取の工芸文化」関連見学会

「鳥取の民芸と遺跡を訪ねて」

実施日：11月15日(水)～17日(金)(2泊3日)

集合：11月15日 11:10 鳥取空港

11月17日 16:00 米子空港解散予定

参加費：47,000円(予定)

定員：40名(先着順)

*以上現在参加者募集中です、詳細は博物館HP内の明治大学博物館友の会行事予定を参照してください。

第11回古代史講演会

「弥生後期から古墳時代への墓制の変遷」

日時：12月2日(土)14:00～16:00

会場：明治大学駿河台キャンパス

リバティタワー2階1022教室

講師：高橋 浩二氏(富山大学准教授)

講演会

「蒼き狼—チンギスハン伝の虚実」

日時：2018年1月20日(土)14:00～16:00

会場：明治大学駿河台キャンパス

グローバルフロント3階4031教室

講師：赤坂 恒明氏

(早稲田大学中央アジア研究所客員所員)

*以上は10月中旬から参加者募集します。

【入会特典】講演会の一般参加費はいずれも1,000円ですが、入会されますと後期会費(1,500円)のみの納入で会員特典として年度内の講演会はすべて無料で参加できます。

明治大学博物館友の会 連絡先

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 明治大学博物館気付 博物館友の会

メールアドレス：meihakutomonokai@yahoo.co.jp

*博物館に友の会の担当者は常駐しておりません。連絡は必ず「ハガキ」または「Eメール」でお願いします。

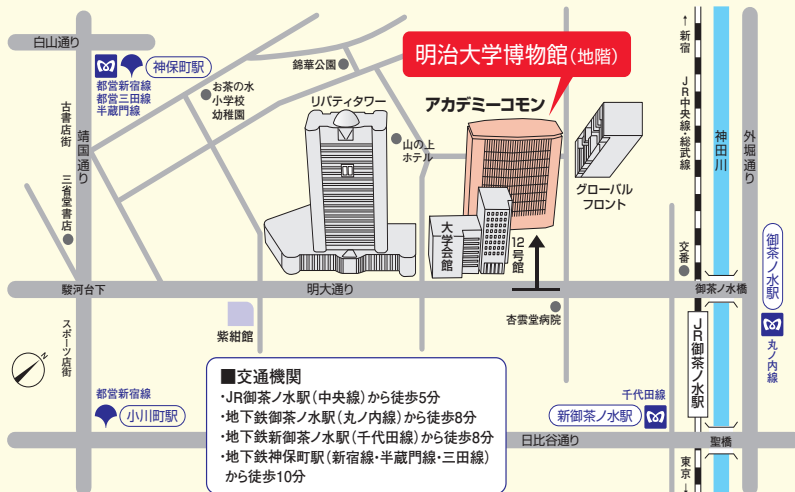
博物館案内

展示室ご利用案内

- ◆開室時間
10:00～17:00(入館16:30まで)
- ◆休館日
夏季休業日(8/10～8/16)
冬季休業日(12/26～1/7)
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆観覧料
常設展無料。
特別展は有料の場合があります。

図書室ご利用案内

- ◆開室時間
月～土 10:00～16:30
- ◆閉室日
日曜・祝日・大学が定める休日
夏休期間(8/1～9/19)中の土曜日
- *図書室はどなたでもご利用いただけます。
*蔵書は閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



交通機関

- ◆JR御茶ノ水駅(中央線)から徒歩5分
- ◆地下鉄御茶ノ水駅(丸の内線)から徒歩8分
- ◆地下鉄新御茶ノ水駅(千代田線)から徒歩8分
- ◆地下鉄神保町駅(新宿線・半蔵門線・三田線)から徒歩10分

編集後記

特集では、2014年以来3年ぶりに開催される博物館主催の特別展を取り上げました。記事の中では展示の注目ポイントが挙げられています。ぜひ、それも照らし合わせながら鳥取県における近世から現代に至るまでの手仕事の歴史を展示室をご覧ください。